

ブラジル・アマゾンで「冬」を詠む

——日本語俳句作者へのインタビューとその作品を通して——

久富木原 玲*

はじめに

一年中、変化に乏しいアマゾンです。そこがいいところでもあるが……。たまにはおしゃれをしたい。俳句とファッションは似ている。洋服にも季節があり、TPOの制約があり、着心地がよく、他人から見て、ちょっとかっこいいと思われる服を選ぶ。俳句も季語の制約の中で、表現したいぴったりの言葉をとっかえひっかえ、選ぶ。それが洋服選びのように楽しい。洋服は、お金がかかるが、言葉は選び放題で何よりタダ。

日本にいたら、俳句を趣味にしたかどうかわからない。いろいろな選択肢があったと思うので。マナウスには、そのころは、ゴルフと囲碁将棋、カラオケくらいしかなかったから。スポーツは基礎的な練習をしないと一緒にプレーできないが、俳句は、その日から入れてもらえます。下手でもまぐれで選ばれるとうれしい。

俳句で本当によかった。 橋本美代子

2022年8月、ブラジル北部アマゾン地方の州都マナウスで句会を続けている俳人のみなさんにインタビューする機会を得た¹⁾。上記の文章は「アマゾンの生活の中に、俳句をどのように位置づけていますか？」という質問への回答である。橋本さんは20代で結婚・渡伯して約40年間、マナウスで暮らしている。

アマゾン河流域は熱帯雨林気候に属する。稿者は、この地で長年にわたって季語を重視する日本語俳句が詠まれていることを知り、現地の俳人は季語や季節をどのように捉えているのか関心を抱いた。そこで今回、12項目にわたる質問をさせて戴き文書による回

答を得た（質問内容は、本稿末尾参照）。

俳句の「言葉選び」は「洋服選び」の楽しさと似ていると言う橋本さんの感覚は言い得て妙。軽やかで、おしゃれで、ユーモアに満ちた生活実感である。これこそ俳句の醍醐味ではないか。

さらに興味深いのは、アマゾンの季節は変化に乏しく、現地での趣味もまたかなり限定的で、それがかえって俳句を選ぶ条件になっているという点である。これもわずか17文字の中で「575」と「季語」を要件とする俳句に通じるものがある。そのような制約にもかかわらず、老若男女誰でも、初参加でも上手・下手にかかわらず参加できるのが良いと。確かにスポーツその他の趣味で誰でもいきなり参加できるものは、あまりないかも知れない。

このように老若男女を問わず楽しめるのが俳句である。句会では、一般的には中心的あるいは指導的な役割を果たす人が兼題を出す。だが、その人の作品も含めて全員の名前を伏せて佳作を選ぶため、作品そのものの評価の判定に上下関係はなく参加者同士は平等である。

俳句は表現そのものには制約があっても、それ以外の制約からは解き放たれた魅力的な文芸である。それでもやはりアマゾンの俳人たちには熱帯という気候ゆえの葛藤があるのではないか。

日本の四季を基準に創られた「季語」や季節感はブラジル、特にアマゾンという熱帯気候の中でどのように捉えられ、工夫されてきたのか。インタビューを紹介しながら見ていく。

I 2つの季節—雨季と乾季—

雨季と乾季しなくて、季節を感じにくい。たとえば菊の花と朝顔が同時に咲く。季節外れでは俳句は詠みにくい。
野沢須賀子

「熱帯気候の中で季節のとらえ方で苦心することがありますか？」という質問に対する回答である。

野沢さんは11歳で両親・兄弟妹と共に渡伯して以来、60余年を此の地で暮らす。10名ほどのメンバーの中では最も長い生活歴を持つ3人のうちのひとりである。同じくらの生活歴を持つ渋谷雅江さん、村上澄枝さんのおふたりも同じように「季節のとらえ方には苦心します。」と言うが、一方で村上さんは、「日本とは違う、アマゾンの景色等、それはそれでとても良いことだと思う。」と回答する。

「菊の花と朝顔が同時に咲」き、句作には適さない気候の中で「マナウス句会」の俳人たちは暮らしの場としてのアマゾンに愛着を持ち、工夫を重ねつつ毎月の句会を開いてきた。句会の開始は1983年で、今年2022年に40周年を迎えた²⁾。草創期の俳人は既に他界して現メンバーの中の最も句歴の長い人で20年弱だという。現在、わずか10名程度の同人であるが、40代から80代にさしかかる年齢層で渡伯時の年齢や生活環境もさまざまである。

ところでアマゾンは「一年中、変化に乏しく」「雨季と乾季しかない」のだが、「雨季と乾季」とは、どのような状況で、生活にどのような変化をもたらすのか。それを端的に示す句を紹介してみよう。

浮家の子等カヌの友呼ぶ秋うらら 東 比呂
2018年版第三十四号句集マナウス四月入選句

雨季に増水して浮いたようになった家に友達がカヌーでやって来る。アマゾン河沿いの家は高床式に建てられていて雨季に入ると何もかもが水没したようになるらしい。逆に乾季になると河底は干上がってしまう。

減水期行き場失う魚の群れ 渋谷 雅
減水期水底今は子らの庭 横山大祐
同上・六月入選句

魚は泳ぐ場所を失い、水底は一転して子どもたちの遊び場となる。雨季と乾季では生活環境ががらりと変化するのである³⁾。

流れゆく犬を哀れみ秋出水 服部タネ女
秋出水思わぬ早さに牛溺れ 服部蒼流
2000年版第十六号二月入選句

犬はおろか、牛までも溺れて流されていく。日本にも梅雨はあるが、そんな経験や想像を遙かに超えるスケールである。「一年中、変化に乏しい」というのは日本の四季を基本にすれば、その通りだが、アマゾンにはアマゾン独特の季節の変化がある。

減水期砂浜子供毬投げす 戸口久子
2016年版第三十二号七月入選句
冬至なるアマゾン満水屋根浮かし 同
2010年版第二十五号六月入選句

1句目は、乾季に「砂浜」になってしまったアマゾン河辺で子どもたちがボール投げをして遊ぶ。「砂浜」とは、まるで海のような。そして2句目。雨季には屋根まで浮く家もある。

広大なアマゾン河の畔、日本における想像を遙かに超える気候の中でマナウス句会は続けられてきた。

インタビューの回答をもう少し紹介しよう。「アマゾンで俳句を詠む際に苦心すること」について。

- ・日本の四季の感覚から抜け出せない。5月だと日本では11月頃なのだと言いついて聞かしている。
橋本美代子

成人後に移住した橋本さんは40年余りにわたるアマゾンでの暮らしがあっても、まずは日本の季節を思い浮かべ、次にアマゾンの季節に置き換える「作業」を必要とするのである。他方、次のような感想もある。

- ・アマゾンの風景を想像すると、独特な俳句が詠まれて不思議に思うことがある。
錦戸みどり

錦戸さんはアマゾンで生まれ育ち、本句会のメンバーの中では唯一の2世である。彼女は「日本のような四季がないので大変な時もある」としながらも「アマゾンの風景」を基に句作することに、ほとんど抵抗感がないようだ。そして自然に「独特な俳句」が出来ることがあって、「不思議な」気持ちになるのである。

なお錦戸さんはインタビュー当時、句歴は1年に満たなかった。彼女は移民の俳句に関する研究をまとめ

たことがあり、その知識を高めるために句会に参加したのだという。丸岡すみ子さんの回答が興味深い。

- ・長く住むと、常夏とは言え、植物や動物、気象状況等、アマゾンにもいろいろな変化があることがわかってくる。 丸岡すみ子

丸岡さんも橋本さん同様、成人後に渡伯して40年余りをアマゾンで過ごしてきた。おそらく橋本さんと同じく日本の季節との比較や感覚の置き換え作業を続けて来られたのだと思うが、その過程を通じて現在ではアマゾンの森羅万象を、ほぼそのまま受け入れている。もっとも自然にそうなったのではなく、

- ・俳句を詠むと、そういう変化に気づくことが増えてきた。 同上

季節にこだわる俳句だからこそアマゾンの微妙な変化を発見するのである。内ヶ崎留知亜さんも、(以下、「留知亜さん」と呼ぶ)

- ・俳句を始めてからは、アマゾンの風景、植物や行事などをよく観察するようになった。

として、次のような回答を寄せている。

- ・橋本さんがマナウスの季節に合った兼題を出していたので、(句作する際には)それほど苦労しなかった。
- ・ただ、アマゾンの行事や植物、食べ物も多く出され、知らないものも多くて苦労した。

「5月は日本では11月」(に当たる)という変換作業をする橋本さんだが、兼題を出す際には「マナウスの季節に合」うものを選ぶようにしていたのである。

なお留知亜さんが「アマゾンの行事や植物、食べ物」等をあまり知らないのは、日本で生まれ育ち大学・大学院修了後、結婚のために渡伯してアマゾンでの生活は10年に満たないからであろう。句歴も短い。

朝倉晴美さんもマナウスでの句歴は短いが、日本での俳句研究や句会経験はある。2020年度より文科省から3年間、マナウス日本人学校に派遣され、この句会の同人となった。ゆえにアマゾンでの生活歴は浅く『アマゾン季寄せ』⁴⁾の存在も知らなかったという。日

本に帰国したら句会仲間に教えたいと思っている。

このように「マナウス句会」はアマゾンで40年以上暮らして句歴の長い人から、10年程度住んで句歴の短い人、あるいは2世として此の地で生まれ育ったが、句歴は1年未満の人など、同人数は少ないものの、年齢、生活歴、句会歴など多様である。

留知亜さんの話題に戻る。彼女がマナウス句会に入ったのは、2019年1月である。だが、その直後の2020-21年の2年間はコロナ禍に見舞われ、対面の句会はいよいよ今年2022年2月に再開したばかりである。

そして今年2022年5月より、橋本さんに代わって留知亜さんが兼題を担当している。

兼題を出すようになった留知亜さんは、新しい試みを始めた。『ブラジル歳時記』と『アマゾン季寄せ』の両方を見比べた上で最終的な兼題を決めるようにしたのである⁵⁾。兼題はそれまで『ブラジル歳時記』から出されていたが、四季で分類される『ブラジル歳時記』はアマゾンの気候とは、どうしてもずれが生じる。そのため月ごとの分類による『アマゾン季寄せ』の方が選びやすいのだという。おそらくアマゾンにしかない気象・食物など生活を彩る例句がより多く掲載されているからであろう。

ところで、2022年4月まで兼題に使われていた『ブラジル歳時記』は佐藤牛童子編である。彼の実兄はブラジルに渡る際に、高浜虚子から「畑打って俳諧国をつくるべし」という句を贈られた佐藤念腹である⁶⁾。念腹はブラジル国内をくまなく巡って虚子の期待通り「俳諧国」を打ち立てた。念腹の影響力は絶大で、ブラジル全土に及んだ。彼は1979年に亡くなったが、現在でも尊崇の念を集めている。

「マナウス句会」が『ブラジル歳時記』を兼題に用い、星野瞳に選句を依頼したのも、こうした流れに沿ったものであろう。星野が世を去った今、その後を継いで選句するのは小斎棹子である。星野も小斎も念腹門下であるから、マナウス句会においても念腹の影響は現在も脈々と受け継がれているわけである。

だが、今年2022年5月からは『ブラジル歳時記』を主とするのではなく、『アマゾン季寄せ』の方が「選びやすい」ということで両方を見比べた上で兼題が出されるようになった。これは稿者から見ると、ごく自然な選択であると同時に画期的でもある。

『ブラジル歳時記』が虚子と日本の四季を規範として仰ぎつつ、特にサンパウロの季節に合うように工夫を重ねてきたように、アマゾンでも現地の俳人たちが

『アマゾン季寄せ』という熱帯の歳時記を創り上げた。しかしそれは長らく「市民権」を得ていなかったように思われる。

なぜアマゾン地方で広く受け入れられなかったのか。そのことについては次節で言及することにしよう。いずれにしても今年5月から『アマゾン季寄せ』が『ブラジル歳時記』と共に、というより、それよりもこの地域の気候と親和性の高いものとして兼題の参考にされるようになったのは、日本の四季やサンパウロの季節感に縛られずにアマゾン独自の自然や風物をより肯定的にありのままにとらえようとする方向を目指したことを意味する。

本節の冒頭で紹介したようにアマゾン地域は熱帯地方独特の気候のため、アマゾン地域に適した歳時記を用いるのは当然と言えば当然なのだが、「文化」は時に複雑で日本の本家本元が打ち立てたルールをどこまでずらし、緩め、改変して新たな規範を創るのかという悩みに直面せざるを得ない。それは新たな挑戦でもある。

ブラジルに日本人が移民として入植してから、すでに110年以上が過ぎた。サントス港に入港した1908年のその時から、ブラジルにおける日本語俳句の歴史が始まったとされるが、その間、8種類もの歳時記が編纂された。その7番目の歳時記がアマゾン河口のベレンの俳人たちが中心となって編んだ『アマゾン季寄せ』である。編集した俳人たちは大胆な決断をした。アマゾンの季節を「雨季と乾季」の2つに大別したのである。その「はしがき」を見てみよう。

アマゾンに住み俳句を愛好する私たちは、アマゾン特有の季語集の必要性を長年痛感して参りました。

先人の残された句集「樹海」によりますとアマゾンを雨季、春、夏、秋、に分けて作句しておられたようですが、この季分けも私たちにはしっくりせず又、上流マナオスと河口のベレンでは大きな違いも見られます。私たちは思い切ってこの地の気象を乾季と雨季に大別して季語集を作ることに決めました。(以下略) 原田清子「はしがき」

「大胆な決断」と言ったが、本節冒頭に紹介した野沢須賀子さんの回答にあるように「雨季と乾季しかない」のがアマゾンの気候なのであって、この地の人々にとっては、その分類は極めて自然なのである。

もちろん、その2つの季節には丸岡さんが述べたよ

うに「長く住むと、常夏とは言え—中略—アマゾンにもいろいろな変化があることがわかってくる」。マナウス句会の俳人たちは、日本やサンパウロの規範とのせめぎ合いの中でアマゾン独特の「変化」を捉えつつ句作に活かしてきた。それは熱帯雨林気候における「季節の発見と新たな表現の集積」である。それは日本にとっても世界的に見ても貴重な文化的営為であり、大切な文化遺産だと思う。

II アマゾンで「冬」を詠む

アマゾンに冬はあるのだろうか。常識で考えればあるはずなどない。たとえば、今まで兼題を出していた橋本さんは「熱帯気候の中で季節の捉え方で苦心することは？」という質問に次のように答える。

・夏の季語には困らないが冬には困る。降ることのない雪や凍てつく寒さなどは(兼題を)出せない。

丸岡さんも同様で、次のように言う。

・夏以外の季節を詠むのは難しい。特に冬は日本での思い出を掘り起こすとか、南伯(ブラジルの南の地方)の様子をニュースなどで見て想像するとかで、あまり実感のこもるものは作れない。

ところがマナウス句会の『句集 マナウス』には、しばしば「冬」の句が登場する。いったい、どういうことなのか。

故郷しのびアマゾンで食ぶ冬至粥 服部タネ女
毛糸編み母のぬくもりマイマフラー 松 正
粗き目に雑な性格毛糸編む 橋本美代子

2010年版第二十五集六月入選句

「冬至粥」は日本の風習を踏襲するもので、ほかにも「ひな祭り」や「盆踊り」など一世の方々が日本の行事をアマゾンでも行なっている例は幾らもある。だが「毛糸編み」や毛糸の「マフラー」には驚く。熱帯の地で果たして本当に「毛糸」の衣類が必要なのだろうか。それとも「毛糸編み」は趣味なのか。『ブラジル歳時記』には「毛糸編む」の季語が掲載されているので、おそらくここから兼題が出されたのであろう。

一方、『アマゾン季寄せ』「2月」には「毛布」「雨季寒」の季語・例句はあるが「毛糸」はない。

熱帯といえども毛布はなされず 榎木田 貞
 アマゾンの夜半の寝覚めや毛布着る 椿 栄子
 雨季寒しアマゾン26度なり 山岡宏子
 『アマゾン季寄せ』2月「毛布」及び「雨季寒」

「雨季」には毛布が必要なのである。「26度」で寒いというのは日本では信じられないが、雨が降ると肌寒く感じるというのが現地の肌感覚である。気象庁ウェブサイトによれば、実は平均気温自体は雨季でも乾季でも、それほど変わらない。雨季は24度程度で乾季には27度になる年もあるが、平均気温はやはり24度ほどである。暑さ寒さの感覚は数字だけではわからないことに気づかされる⁷⁾。

秋暑いそんなマナウス1年中 小粥壮一郎
 2022年版第三十六号二月入選句
 (36・37号合冊版、前者は2020年度分)

マナウス日本人学校の児童生徒の句。保護者の転勤などで、ここで過ごす期間は、おそらくそう長くない彼らは、それぞれの季節の微妙な違いを感じることは少なく、1年中暑いのであろう。もちろん句を詠んだ日の気温や天気にもよるだろうが、雨季でも晴れた昼間は暑いのに違いない。だが雨が降るとやはり寒い。1年後の2月には、こんな作がある。

やや寒し雨音しずか朝寝する 野沢須賀子
 2022年版第三十七号二月入選句

同じ2月の作品とは思えない。当日の天候や時刻、年齢、生活歴などによっても違ってくるのであろう。

寝る夫に毛布掛け足す夜寒かな 服部タネ女
 一枚の毛布引合う夜寒かな 同
 2003年版第十八号三月入選句
 アマゾンの雨季の夜冷えて蒲団出す 戸口久子
 朝一番寒さに備え重ね着す 渋谷 雅
 2011年版第二十六号五月入選句
 朝寒し古き茶羽織出して着る 服部タネ女
 同上 第二十六号四月入選句

「雨季」は肌寒く感じられ、「毛布」や「蒲団」を掛け「重ね着」もする。日本にも「梅雨寒」があるから理解はできる。

雨続き寒さつのりて夜の長き 渋谷 雅
 2013年版第二十八号三月入選句
 朝寒しアマゾンにもあるこの季節 服部タネ女
 2008年版第二十三号二月入選句
 マナウスの雨季はひねもすジャケット着て 西木戸 保
 アマゾンに冷え込み続き雨季明ける 鈴木多美子
 2005年版第二十九号四月入選句

朝や夜だけではない。日中も上着を手放せず、その寒さは雨季明けまで続く。「朝寒」「肌寒」は『アマゾン季寄せ』では2月の季語として挙げられている。

ところで丸岡さんは「(冬は)日本での思い出を掘り起こす」しかないと回答したが、その後、こんな言葉を続けている。

・現地の人は「雨季を冬」と言うように、自分でも、
 そう思うようになってきた。

この感覚は先に挙げた作品を見ればよくわかる。雨季は、たとえ26度でも寒く感じるし、朝晩は毛布や蒲団が必要で日中でも上着が手放せないこともある。それは乾季にはないことであろう。ならば現地の人が「雨季」を「冬」に当てるのも頷ける。もっとも「現地の人」とは、もちろん日本人であろう。熱帯で生まれ育った人に「冬」の感覚があるとは思えない。

「雪」や「凍てつく寒さ」を「冬」の象徴だと考えるのは、日本の季節を知る人の感覚である。そこまでの寒さではなくても、熱帯にも「寒さ」や「冷え」があることを此の地の俳句によって知る。

だが、約60年前には「雨季」を「冬」に当てはめることをブラジルにおける俳句の第一人者である佐藤念腹は受け入れなかった。

1964年、念腹はアマゾンの、特に河口付近のベレンを中心とする俳人たちが上梓した句集『樹海』を贈呈された時、次のようにコメントしている。

本集巻末の解説「アマゾン俳句の季節」といふのに、
 1月－3月 雨季
 4月－5月 春
 6月－10月 夏
 11月－12月 秋

と区別されている。一中略「雨季」を冬に当てるのはどういふものか。雨季とは其の名の如く日々ス

コールが来、河川は増水し、子子が跳ね、マレイタが発病するのが常識となつてをり、日本でも梅雨の時期を雨季と云つてをる。

—中略—

アマゾンの雨季は何月だといふのなら解るけれども、雨季が冬だといふのはをかしいと思ふ。⁸⁾

念腹はアマゾンの俳人たちの努力を認め、同じ「俳話」の中で次のように述べている。

アマゾンの俳人たちは、四季是夏といふ凡そ日本式歳時記では律し得ない季感と闘いながら、日々その句作に励んでいる。

にもかかわらず、その工夫を「をかしい」と評するのである。

サンパウロの冬は雪こそ降らないものの、最低気温が10度ほどに下がり、まあまあ寒い。だからアマゾン地域の「雨季」を「冬」に置き換えるのは納得できなかったのであろう。ブラジル全土を巡って「俳諧国」を打ち立てた念腹でも、アマゾンの気候に十分な理解は及んでいない。と言うより、やはり丸岡さんの言うように「長い間、住んでいると、そう思うようになって」来るものなのであろう。俳句は、その土地の、その時々季節感を詠むから知識としての理解と実際にその土地に住んで感得する季節に違いが生じるのは当然である。

念腹は「雨季」について日本の梅雨を引き合いに出すが、前に掲げた句のようにアマゾンでは「雨季」にはカヌーで行き来し、犬や牛が流されて溺れ、家は屋根まで浮くこともある。日本の梅雨とはスケールが全く異なるのである。日本のホトトギス派の俳句をブラジルに根付かせようとした念腹の意気込みには感服するほかないが、アマゾンに暮らす俳人たちの季節感や肌感覚にまでは思い至らなかったものと思われる。

ところでアマゾンの俳人たちが上梓した句集『樹海』の序文には、次のようにあるという。⁹⁾

アマゾンにあっては、冬の季節は全く実感が得難いものであるので、雨季という、特種(ママ)な季感を持つ一時季をもって、これに替えて見たものである。

一世の移民俳人たちは日本の冬を知っているから、ア

マゾンでは本当の日本の「冬の実感」は持てないのである。それで「雨季」を熱帯の特殊な時期と見て、これを「冬」に置き換えてみた。常夏のアマゾンではあるが、「寒い」と感じる時は確かにある。その意味で雨季が熱帯の「冬」に位置づけられる理由はある。

しかしながら、それも俳句にはやはり「四季」が必要だという日本の俳句の枠組みから逃れられないがための工夫であった。

マナウス句会は、これを始めた花田良夜によれば、その初期の段階から、

私達はアマゾンの花鳥諷詠をモットーとして努めて来ました。 1987年版第三号・序文

とあり、さらに、その師・星野瞳は同じ三号の序文に次のように記す。

特に注目したいのは、皆々が深くアマゾン諷詠に励んで居られることである。—中略—やがてはアマゾン歳時記が形を成して、生まれ出て来るのである。

同上

三号の発刊は1987年である。良夜自身、アマゾンの歳時記編集を試みたようであるが、実現には至らなかった。そして、その約20年後の2004年に『アマゾン季寄せ』が上梓されたのであった。それはアマゾン河口のベレンを中心とする俳人たちによって成し遂げられ、アマゾン地方各地の俳人の作品に目配りして編集されている。その意味では良夜が目指し星野も期待したアマゾンの歳時記は『アマゾン季寄せ』に結実したのだと言えよう。にもかかわらず『アマゾン季寄せ』はアマゾン地方で広く活用されたわけではなかったようだ。これには後述するように、サンパウロ俳壇(特に新聞紙上)を中心とするネットワークやサンパウロで編纂された『ブラジル歳時記』の存在が密接にかかわっていると考えられる。

ところで今回のマナウス句会の俳人からは、次のような声が寄せられている。

・アマゾンの季語でない句作できない。

渋谷雅江

・「ブラジル歳時記から兼題が出ていたので参考にすることが多かったが何かピンと来ない時に「アマゾン季寄せ」を見ることもあった。 丸岡すみ子

2022年4月まで兼題を担当していた橋本さんは『ブラジル歳時記』を参照して「サンパウロに合わせて兼題を決めていた」とする。その一方で、

- ・(橋本さんは) マナウスの季節に合った兼題を出していた。 留知亜

このような経過と工夫を経てマナウス句会は2022年5月から留知亜さんが兼題を担当することになった。

サンパウロの選者に選句を仰ぐのは今まで通りだが、マナウス句会の俳人たちは今年5月、サンパウロの気候や『ブラジル歳時記』の規範性から自然に緩やかに離陸したのである。

III 選者について

マナウス句会の俳人たちはサンパウロの俳人に選句を依頼してきた。それは今でも変わらない。最初の選者・星野瞳はブラジル俳句界の第一人者・念腹の弟子であり念腹の影響は今もアマゾンにまで及んでいる。

現在のマナウス句会メンバーの作品はサンパウロの選者に送られ、その中の秀句がサンパウロの新聞の「俳壇」に掲載される。それは現代日本の新聞の「俳壇」欄と似ていて、メディアを通じて全国レベルで互いに各地の俳句を知ることができる。もっとも日本の場合には個人が直接、新聞社に投稿するが、ブラジルでは選者に送り、選句された句が掲載されるというシステムになっている。ブラジルのすべての句会がこのような形を取るのかどうかかわからないが、少なくともマナウス句会では、そのようにしている。

現在の選者についても、いつ誰が依頼したのか、今の俳人たちは、その経緯については知らないようだ。最初の選者である星野瞳が亡くなって、新聞の俳壇を受け継いだ小斎棹子に橋渡ししたサンパウロの俳人があったようだ。それに関する回答を紹介しよう。

- ・小斎先生は、(星野) 瞳先生が引退されるので、そのまま引き継がれたのだと思う。こちらから依頼したわけではない。 橋本美代子
- ・(橋渡ししてくれた方は) サンパウロの瞳先生の句会の方だが、どなたかは知らない。 村上澄枝

最初に星野瞳に選句を依頼した経緯も今ではよくわからない。

- ・星野先生が長年「ニッケイ俳壇」の選者だったことが理由か？ 丸岡すみ子

このように、サンパウロの「ニッケイ俳壇」に収束される形でブラジル全土から作品が集まり、その中の秀句が新聞に掲載。サンパウロの俳人たちがブラジル各地の句会と連絡を取り合って、星野瞳あるいは小斎棹子の許に作品が集まるような仕組みが創られているのである。

ではコロナ禍においてマナウス句会とサンパウロの俳人たちは、どのように連絡を取り合っていたか。

- ・2020年3月から句会中止。兼題は出ていたので、句作して、メールで西谷律子という方に送り、この方が小斎先生やニッケイ新聞に取り次いでくれた。 丸岡すみ子
- ・小斎先生が選句した作品がニッケイ新聞に掲載され、その写真を西谷さんが送ってきて、メールやSNSで会員に紹介した。 同上¹⁰⁾

ここには西谷律子さんという俳人名が記されている。なお、選者とのやりとりは以下のものであった。

■星野瞳氏に関して

星野瞳は郵便で送られてくる作品を添削し、時に電話で話すこともあった。

- ・星野先生は、清書した原稿を郵送すると添削したものが送り返されてきた。 橋本美代子
- ・1991/8に入会したときは星野瞳先生だった。マナウス句会は花田良夜さんなど十数名だった。瞳先生は念腹門下と聞いている。郵便でやりとりし、時には電話で話すこともあった。 村上澄枝

■小斎棹子氏に関して

- ・コロナ禍の前までは清書した投句原稿を郵送。「写生」を重んじて「動詞」はあまり使わないように説明的にならないようにと指導された。 丸岡すみ子
- ・パソコンで清書したものを2部郵送し、添削が返送されてきた。途中、リモートになってパソコンのできない棹子先生には、サンパウロのお弟子さんにメールして、それを先生に届けてもらっていた。返送はされなかったため、添削は新聞に掲載されたも

のを見て確認していた。

橋本美代子

星野・小斎両氏ともに添削し、時には電話で話をすることもあった。コロナ禍におけるメールでの連絡は、お弟子さんがサポートしてマナウス句会同人たちとやりとりしていた。こうした営みが地方の句会を支えてきたのである。

念腹没後に実弟・牛童子と弟子・星野瞳との間で、いわゆる「跡目争い」が起こった¹¹⁾。その後マナウス句会は選句者には星野を迎え、歳時記の方は牛童子編の『ブラジル歳時記』を用いてきたということになる。もっとも『ブラジル歳時記』は2006年刊行で、マナウス句会発足当時にはなかった。それ以前はどの歳時記を用いていたのかは、不明である。

IV 句作は生活でどのような位置を占めるか

句作や句会に参加する理由について聞いてみた。それらをまとめると次のようになるだろう。

- ・ライフイベントの中でも、句会のメンバーには、いつも支えてもらった。

句座の時間、年齢・職業・環境の違う者同士の交流から得る知識・感性はかけがえのないもの。

朝倉晴美¹²⁾

では、その「かけがえのないもの」とは具体的にどのようなことであろうか。同人の回答を紹介しよう。

- ・句会は生活の「句読点」のようになっていて、作品に思いを吐露することで気持ちが軽くなる。
- ・自分の作品が評価されたり『ブラジル日報』の俳句誌面への掲載も励みになる¹³⁾。
- ・作品からにじみ出るやさしさやユーモアなど、その人の人柄に接する喜び。
- ・月に一度、句会で会って、おしゃべりしたり、情報交換することも楽しみのひとつ。
- ・町の生活しか知らない人にとっては、大自然の様子や入植の話聴くのも貴重。
- ・日本語でのおしゃべりの楽しさ。
- ・面白くて17年間、全く欠席なし。

ここには日本語で俳句を創り、日本語で批評し合い、日本語でおしゃべりをする楽しさが溢れている。それは単なるおしゃべりではない。

- ・日本語を忘れない、日本の文化を忘れないため。

渋谷雅江

- ・静まり返り、一斉に選句する瞬間が好き

村上澄枝

渋谷さんは12歳、村上さんは18歳でアマゾンに入ってから60年余り。渋谷さんの言葉には12歳からずっと自身のアイデンティティを意識し、確認してこられたであろう歴史を感じさせる。また村上さんの言葉には、選句の際に、息を止め時間も止まるような真剣さで向かい合う様子が印象に残る。

では「句会がなかったとしたら？」どうか。ひとりを除いて、全員、

- ・句会があるから句作している。
- ・ひとりでは続いていないと思う。

と回答している。やはり「兼題」や句会が「抛り所」になっており、その意味では「座の文芸」の要素を残している。日本語で語り合うことによって、かけがえのない時を共有するのである¹⁴⁾。

むすび——アマゾンにおける「冬」の発見

熱帯雨林気候のアマゾンにも「冬」の句は確かにある。日々の生活において「雨季」の時期には冷えや寒さを感じて上着や毛布・蒲団が必要になる。それは現地で暮らす人の実際の肌感覚である。

では「現地の人」とは誰か。日本人か日系人、おそらく日本人1世なのではないか。先住民に「冬」という感覚はないであろう。またヨーロッパその他の温帯地域からの移民は、熱帯に住んで「雨季」を「冬」に置き換えたりするだろうか。26度位の気温で上着や毛布が要るからと、あえて「雨季」を「冬」という季節を連想するであろうか。

現地の日本人・日系人が「雨季」を「冬」とするのは、やはり俳句文化に基づく日本的な発想がその基底にあるからだと思われる。日本には1100年以上前に四季にこだわり、季節の微妙な移り変わりに過剰なまでに美意識を研ぎ澄ませた文化が誕生した。905年成立の勅撰和歌集『古今和歌集』である。そこには「俳句」という言葉や発想の源流となった「誹諧歌」という部立も設けられている。

その季節感は京都を中心とするものだが、近現代における俳句が季語を必須とすることと、『古今集』以

来の季節の推移を重視する伝統とは無関係ではない。先にサンパウロは雪こそ降らないが、「冬」に近い季節があると述べた。最低気温が10度位まで下がるので、冬と呼んでもおかしくはない。

しかしながら、一般的なブラジル人は季節の推移と季節ごとに咲く花などを関連づけてとらえる意識は希薄だと聞く。よく知られた話だが、増田恆河が575シラブルと季語を入れたポルトガル語の俳句普及を目指すに当たっては、春夏秋冬の季節感と植物との関係から教えたという。たとえば「イペーの花は、いつ頃咲くか?」「年に1回、暖かくなった時期に咲くから、春の花」であり、だから「イペー」は春の季語なのだと説いた¹⁵⁾。

サンパウロでこんな具合だから、アマゾンで「冬」を詠むのは、かなり季節にこだわる人々であろう。日本の四季の枠組みが意識の中にしっかりと根を下ろしているからこそ、「雨季」を「冬」になぞらえるという発想も出てくる。『アマゾン季寄せ』は、熱帯の気候を重視して「雨季」と「乾季」に大別したが、アマゾンの俳人たちは、やはり「冬」を詠み続けている。「冬」がなければ四季は完成しないのである。

「冬」は俳句には必須であって、しかも幻のように手の届かないものなのではないか。「毛布」や「蒲団」が必要な寒さは感じて「凍てつく冬」や「雪」は望めない。それはアマゾンでなくてもブラジルにおける一世の日本人移民に共通する意識かも知れない。

ところで『ブラジル歳時記』を眺めていて、驚いたことがある。「冬」の季語とその説明がかなり多いのである。ページ数をみれば、一目瞭然である。

| | | |
|---|------|------------|
| 夏 | 261頁 | 新年・11月—12月 |
| 秋 | 128頁 | 2月—4月 |
| 冬 | 213頁 | 5月—7月 |
| 春 | 120頁 | 8月—10月 |

しかも春夏秋冬の四季は3ヶ月ごとに割り振られている。そもそも3ヶ月ごとに四季がめぐるとされていること自体、驚きを禁じ得ない。夏が最も多いのは当然のこととして「冬」が2番目に多いのは、どうしてもだろうか。「冬」は200頁を越す量で、春・秋よりも100頁近く多く、稿者の予想を大きく上回った。亜熱帯のサンパウロで、なぜこれほど「冬」が重視されるのか。サンパウロは標高800メートルの高台に位置するから四季に近い季節がある。だが、それにしても

「冬」が夏に次いで多いのはなぜなのか。『ブラジル歳時記』の季語そのものについて検討する必要はあるが、それにしても、である。

稿者は2016年の冬の終わりから春、そして夏の初めを約3ヶ月間、サンパウロで過ごしたことがあるが、「春」は短かった。イペーの花が咲いたと思うと、1ヶ月もしないうちに「夏時間」になった。それなのに『ブラジル歳時記』の「春」は他の季節同様、3ヶ月間なのである。その上、「冬」が夏に次いで2番目の季節を占めるとは思えない。『ブラジル歳時記』もサンパウロの俳人たちも「冬」の季節・「冬の季語」をことのほか、重要視していると思われる。ブラジルの日本人にとって「冬」は特別なのではないか。

これを象徴するような物語がある。2022年、ブラジル独立200年を記念する日系3世による小説『ニホンジン』の日本語訳が刊行された¹⁶⁾。この小説はブラジル移民1世から3世代にわたる家族の歴史を描くもので、その冒頭にキミコというヒロインが登場する。

1910年代、ブラジルへの移民事業が開始されたごく初期の頃、彼女は夫と共に1世移民として渡るが、体が弱く入植地の生活になじめずに若くして亡くなってしまった。その彼女の心を占めていたのが故郷の「雪」であった。ブラジルでは降ることのない「雪」。それでも、いや、だからこそ彼女は「雪」の幻影を求め続けた。「雪」は日本の象徴であり、幻でもあった。それは遂に帰ることのない母国への憧れであった。

小説『ニホンジン』で語られるこのヒロイン像は、現在、ブラジル移民の歴史が110年以上に達し、この作家のように日系3世や4世が多方面で活躍するイメージとは、かけ離れているかも知れない。だが1世の多くは心の奥底で、このヒロインと同じような故国日本への幻想を共有していたのではなかろうか。日本からのブラジル移民1世はブラジルに定住する気はなく、一旗挙げたら故国へ戻るつもりだったという。だがブラジルへ渡ってみると、日本への帰国は不可能で、ほとんどの人がブラジルで人生を終えた。「雪」は帰りたくても帰れない日本の象徴であり、幻影だったとも言える。

ただしアマゾンへの移民、特に戦後移民は初めから定住する目的だったとされる。ゆえに「冬」や「雪」が故国への憧れであったとしても、帰国できない絶望感とは異なるであろう。日本への郷愁はもちろんあるにしても「雨季」と「乾季」しかない熱帯気候の中で、

何とか「冬らしい」感覚を得て、それを「春夏秋冬」という季節感の器＝俳句に盛ることによって日本の四季に準えたのであろう。句集『樹海』が「雨季」を「冬」に置き換えたのは四季を規範とする日本文化に何とかして寄り添いたいという願望と葛藤を示している。これに対して『アマゾン季寄せ』は当地の気候の方を重視して「雨季」と「乾季」に大別したのだった。では現代のマナウス句会の俳人たちはどうか。

- ・季語は日本の宝 丸岡すみ子
- ・季語がなければ俳句ではないことを知った 野沢須賀子

このように俳句の核心にはやはり季語があるという意識は明確にあるものの、『ブラジル歳時記』だけでなく『アマゾン季寄せ』も重視して柔軟な句作を続けている。

アマゾンにおける作品群及び『アマゾン季寄せ』の編集は、熱帯における新たな規範を創っていく試みであり挑戦でもある。その焦点のひとつが「冬」という季節であり「冬」の句であったと思う。こうした葛藤の中で詠まれてきた作品は貴重な生活記録であると同時に、それまで日本人がほとんど経験したことのない熱帯気候における表現が込められた文化遺産としても貴重である¹⁷⁾。

ところで念腹は、こんな感想を漏らしている。

私は嘗て、ブラジルの四季は日本移民が発見したと言ったが、俳句の季題をブラジルに開設したのも、我我日本移民といふことになる。¹⁸⁾

念腹の顰に倣えば、アマゾンの俳人たちは熱帯の中に「冬」を発見したのである。

そして2022年5月、マナウス句会では『アマゾン季寄せ』を重視した兼題が出されるようになった。マナウス句会は新たな転換点を迎えたのである。熱帯における葛藤の中で微妙な季節の変化を受け止めて詠み続けられていくであろう、世界のどこにもない熱帯俳句が、これからどのような作品を紡ぎ出していくのか、注視していきたい。

付記

本稿はマナウス句会同人のみなさまの協力なしには、到底、実現の運びには至らなかった。この場を借りて厚く御

礼申し上げる。そして同人のみなさまと稿者とを緊密に結びつけ、精力的に、またきめ細やかに支えて下さったのは、内ヶ崎留知亜・アマゾナス連邦大学准教授である。幸運なことに内ヶ崎准教授は3年近く前に本句会に参加しておられたため、『句集 マナウス』等の資料収集及び研究倫理審査のための句会同人への質問回答・録画等の同意書等必要な手続きは、すべて同准教授にお骨折り戴いた。深謝申し上げます。

なお研究代表者であり、このマナウス句会でのインタビューを計画した稿者は残念なことに直前に渡航を取りやめざるを得なかった。そのため、ここに引用した回答は研究倫理審査申請のために事前に戴いた文書による内容に基づいている。8月28日の句会には、研究分担者2名(白石佳和・高岡法科大学准教授及びスエナガ エウニセ愛知県立大学准教授)が参加して録音させて戴いた。追記事項等は別の機会を期したい。

その他、句会同人以外のアマゾナス連邦大学におけるポルトガル語及び日本語俳句研究者等にも別の質問項目を立てて回答依頼した。これも別の機会に譲る。

なお本文中の下線は、すべて私による。

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)課題番号21H00520の一部である。

注

* 愛知県立大学学長

- 1) 2022年8月29日のマナウス句会でインタビューするために、事前に稿者の本務校にて研究倫理審査を受けた(愛知県立大学・承認番号2022-023)。その際、マナウス句会同人の方から、個人情報にかかわることを聴いてこそ作品の背景に対する理解が深まるのではないかという要請を受けたため、それらも含めた12項目の質問を用意して、研究倫理審査委員会に申請した。渡航前に「同意書」及び「回答」を文書の形(スキャンして添付)で戴いたため、本稿における回答は、すべてその引用である。なお質問内容は本稿末尾に【参考】として掲げた。
- 2) コロナ禍における2020年7月から22年2月まではメール・Whats Appを使った投句・選句・選評を続けた(留知亜さんの回答より)。
- 3) ビデオ『アマゾンに生きる』1955年、日本映画社、解説(語り)・小沢栄。1954年当時を映したものだという。神戸市にある一般財団法人日伯協会(海外移住と文化の交流センター 移住ミュージアム)で、このビデオを拝見する機会を得た。稿者は雨季のアマゾンを訪ねたことはないが、古いこの映像を見る限り、ほとんど船上生活のようで乾季の時期からは想像できない光景である。但し「水涸れて小川の魚行き場なし」「句会マナ

- ウス」(16号5月蒼流)の作のように、干上がるのは大河本流ではなく支流の「小川」なのであろう。
- 4) 『アマゾン季寄せ』は1962年から2003年までの40年間の作を集めた歳時記。「はしがき」は原田清子。竹下澄子による「あとがき」には、ベレンの句会同人が発起人となって、「雨季と乾季」に大別して、「1月から12月」の季語を収録、例句は「風土の作品をモットー」にして、「この地でなくては詠めない作品等は当然採録したとある(原田清子他編、汎アマゾニア日伯協会、2004年1月)。なお、上記「ベレン」はアマゾン河口近くの都市で、マナウスは上流の都市。
- 5) 『ブラジル歳時記』は、佐藤牛童子編著、日毎叢書企画出版、2006年10月。本歳時記は、8番目のもので、これ以降ブラジルにおける歳時記は刊行されていない。
- 6) 虚子より「畑打って」の句が贈られた時の状況は蒲原宏による評伝に詳しい(『畑打って俳諧国を拓くべし 佐藤念腹評伝』p. 88、大創パブリッシング2020年6月10日)。念腹は1926(大正15)年にブラジル移民を決意、1927(昭和2)年3月21日頃に上京し、ホトトギス発行所に虚子を訪ねたが、その際に虚子は短冊に3句を揮毫した。そのひとつが「畑打って」の句である。本書は、この時の念腹について「短冊を手にした念腹は、郷里を後にする頃から抱いていた薄幸の没落感が何処かへ消散してしまうような使命感が鬱勃と体に満ちてくる思いがしてくるのを感得した」と記す。
- 7) 「気象庁ウェブサイト」マナウスの2017-18年の平均気温に関する天候データによる。
- 8) 『念腹俳話』12、1964年6月25日(ブラジルトツパンプレス印刷出版会社、1984年6月)
- 9) 『樹海』は未見。注7)『念腹俳話』より転載。
- 10) 「ニッケイ新聞に掲載」というのは、「ニッケイ新聞の『ニッケイ俳壇』に載る」の意である。本誌は、2021年12月に廃刊になり、2022年1月に新しく『ブラジル日報』が刊行され、小斎棹子等を選者とする「ぶらじる俳壇」が設けられた。
- 11) 細川周平はこの間の事情を簡潔に記している。「念腹七回忌を済ませた翌年(1986年)には門下の星野瞳が『子雷』創刊を発表したものの、牛童子ら『朝蔭』の主軸俳人が連名で反対文書を出すなど確執があって実施が遅れた。念腹は遺書にパウリスタ俳壇は瞳に、俳誌は牛童子に継がせると記したという。瞳は俳誌立ち上げの意思はないと4年前に明言したにもかかわらず前言を翻したと『朝蔭』は非難した。一中略(そこで瞳は)万全の構えでホトトギス一門への帰依を誓った」「3 俳句一結社組織の移植」『日系ブラジル移民文学 日本語の長い旅 [歴史]』みすず書房、2012年。
- 12) 朝倉さんは、日本から3年間の派遣で渡伯しており、ここで言う「句会」は主に彼女の日本におけるそれを指しているであろう。だがマナウス句会の俳人たちにおいても共通する思いなのではないか。
- 13) 『ブラジル日報』については、注10)参照。
- 14) 細川は、ブラジルの句会に同席した際の感想を「言葉の陽だまりでなごむような幸福感を感じ、一中略—母国語への思いを確かめ合う一世の姿に心を動かされた」と言う(「3 俳句一結社組織の移植」注11)に同じ)。なお2016年10月27日、稿者は小斎棹子主催「木犀句会」を見学・参加させて戴く機会を得た。そこには移住者だけでなく転勤で渡伯していた方々も参加しており、実には和やかな雰囲気だったのが印象に残っている。
- 15) 増田恆河「ブラジルにおけるハイカイの季語」『俳句文学館紀要』9、1996年10月、pp. 1-4。増田は「グレミオ ハイカイ イペー」という結社を立ち上げてポルトガル語で「季語」と「5/7/5」シラブルを兼ねたハイカイの普及に努めた。彼の死後は姪のテルコ オダが遺志を継いで活動している(コロナ禍で一時、活動中止したが、現在、再開されているかどうか、わからない)。なお稿者は2016年10月1日にその句会を見学させて戴く機会があったが、オダ氏は「ブラジル人は季節の感覚があまりなくて季語を理解してもらおうのが大変です」と話して下さった。
- 16) オスカル・ナカザト著、武田千香訳、水声社。ブラジルのジャブチ賞受賞作。本賞は日本における芥川賞のように最もよく知られた賞とされる。なお、これより前、ブラジルで中田みちよ・古川恵子による日本語訳も出ている(『ブラジル文学翻訳選集』第三巻『にはんじん』ブラジル日系文学会、2015)。武田訳は、これも参照したとする。
- 17) 第二次世界大戦中といわゆる「南方」へ赴いた人々が熱帯における俳句を俳誌『ホトトギス』に投稿した例はあるが、ごく短期間にとどまる。また小林英二編著『フィリピン歳時記 この魅力ある人々』(マニラ句会1991年)によれば1988年にマニラ句会が創立された。以後、継続されたかどうかについては未調査。
- 18) 念腹「あとがき」(選者佐藤念腹『木蔭雑詠選集』永田書房、1979年7月)。なお、ここで彼は「四季がないと言われる亜熱帯のブラジルにも、一中略—春夏秋冬の移り変わりのあるのを知る。亜熱帯育ちのブラジル人は、元々季節の変化などに気が付かず、極めて無関心だ。一中略—こんな環境の中で、花鳥諷詠の俳句を作らうといふのだから、まったくの新天地に鋏を入れる心構で、季題の一つ一つを開発するひとから始めねばならなかった」。この「あとがき」は、白石佳和氏の教示による。

【参考】句会同人への質問項目

1. 俳句を始められたのには、何かきっかけがありますか？ どのような理由から始められましたか？
2. 句会に参加し続けてきた理由は何ですか？ 句会に参加する楽しみや意義をどのようにとらえていらっしゃいますか？
3. ・ひとりで句作を続けるだけで句会がないとしたら、どうでしょうか。
・コロナ禍で句会のなかった時期は、どのように過ごされましたか？ その間もひとりで句作を続けていらっしゃいましたでしょうか。その作品を句会仲間に見せたり、手紙やメールでやりとりをされたりしましたか？
4. 日本語俳句を詠むことをアマゾンの生活の中で、どのように位置づけておられますか？ 日本で暮らしていたとしたら、やはり俳句をなさっていたと思いますか。
5. 熱帯気候の中での季節のとらえかたで苦心することはありますか？ あるいは季語によって新たな風景の発見や自分自身の感じ方に驚くような感覚を持たれたことがありますか？
6. 季語をどのようにとらえていますか？ 句作の際には、まず季語を置きますか？
7. 『アマゾン季寄せ』を活用されていますか？ あまり使っていない場合、季語は何に基づいて句作していらっしゃいますでしょうか。
8. 以前、選句をなさっていた星野瞳氏に、選句を依頼されたことについて。
 - ・どなたを通じて依頼されたのでしょうか。
 - ・星野氏に依頼されたのは、どのような理由によるのでしょうか。
 - ・星野氏には、どのような形で作品を送り、星野氏はどのような指導・コメントをされて来られましたでしょうか。
9. 現在の小斎棹子氏に、選句を依頼されたことについて。
 - ・小棹氏には、どなたを通じて依頼されたのでしょうか。
 - ・どのような理由で小棹氏に依頼されたのでしょうか。
 - ・小棹氏には、どのような形で作品を送り、小斎氏はどのような指導・コメントをされていますでしょうか。
10. 句作は、生活の中で、また人生において、どのような位置を占めていますか？
※4と重なる質問になりますが、あらためてお聴きできればと思います。
11. 今までの『句集 マナウス』には、先住民（「土人」「土民」「インジョ」）との交流が詠まれています。そのような交流について、経験されたことやお聞きになったこと等でご存じのことがありましたら教えて下さい。
12. 最後に、次の点について、教えて戴ければ幸いです。
 - ・お名前
 - ・現在の年齢と渡伯した年齢
 - ・日本での出身地
 - ・マナウスでの入植地（生活し働いてきた場所、2世の場合、育った場所）
 - ・家族構成